

### ロボティクスの原典

小谷内 範穂 (ロボティクス学科)



『ロボット(R.U.R.)／チャペック 作、千野栄一 訳／岩波文庫, 1989』

『われはロボット [決定版] アシモフのロボット傑作集／アイザック・アシモフ著、小尾 芙佐 訳／ハヤカワ文庫 SF, 2004』

『I, ROBOT／Isaac Asimov／HarperCollins, 2018』

『新版ロボット工学ハンドブック／日本ロボット学会編／コロナ社, 2005』

これらは、ロボット工学の原典ともいべき書です。

「ロボット(R.U.R.)」は、「Rossum’s Universal Robot」という原題で、まさしく「Robot」という単語が1920年に最初に用いられた書です。ロボットに興味がある方は、一度読んでおくとよいと思います。チャペックは戯曲家即ち劇作家であったので、もともとは脚本であったものを小説化したものです。当然、登場人物は俳優が劇場で演じるので、人間そっくりという設定は、人間が衣装だけ変えて演じるということになります。この劇では、最後にアダムとイブともいべきロボットが現れて子供を産むというところで終わっています。この設定から、R.U.R.のロボットは機械人間ではなく、有機的な人工生命体の方が近いのではないかと、言われることもあります。まあ、1920年当時は無機物も有機物もわからない世界でしたから、そんな固いことを言わないでください。

「われはロボット」は、有名なSF作家アイザック・アシモフが残した短編集を集めたもので、冒頭にこれも有名な「ロボット工学三原則」が出てきます。

-----  
ロボット工学の三原則

- 第1条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。
- 第2条 ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が、第1条に反する場合は、この限りではない。
- 第3条 ロボット、前掲第1条および第2条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

——『ロボット工学ハンドブック』第56版、西暦2058年

-----  
短編のなかでは、しきりにこの三原則の解釈によるパラドックスがストーリーのオチとなっていることが多いです。

「I, ROBOT (English Edition)」は、1950年に出版されたものの英語版です。ここでは、

-----  
The Three Laws of Robotics

- 1 A robot may not injure a human being, or, through inaction, allow a human being to come to harm.
- 2 A robot must obey the orders given it by human beings except where such orders would conflict with the First Law.
- 3 A robot must protect its own existence as long as such protection does not conflict with the First or Second Law.

Handbook of Robotics, 56th Edition, 2058 A.D.  
-----

となっています。即ち、この時点で、「Robotics」という言葉ができていたこととなります。この「Robotics」を日本語訳するとき「ロボット工学」と訳す場合が多いようです。

日本ロボット学会を創設するとき(筆者は創設発起人の一人です)、Robotics をロボット工学と狭く訳すのではなく、ロボット社会学、ロボット経済学、ロボット人類学などを含めた「ロボット学」と定める、としました。

最後の、「新版ロボット工学ハンドブック」は、2005年にSFではなく、現実の世界で出版された本物の「ロボット工学ハンドブック」で、第2版です。日本ロボット学会により、第1版が1990年に出版され、およそ15年周期で改訂され、第3版は、2021年出版を目指して原稿が集められていて、筆者も第1版につづいて30年ぶりに、原稿を寄せさせていただきました。今現在出版予定が聞こえてこないのが2022年以降になるかもしれません。

ということで、現実の世界では、2058年まであと37年しかなく、いまのペースだとせいぜい第5版が出るかどうかです。仮に毎年改訂しても第40版ですが、技術の進歩からすると無理そうです。

すでに、現実の世界では、アニメでの設定上の鉄腕アトムの誕生日、2003年4月7日はとっくに過ぎ去っています。

「2001年宇宙の旅」や「2010年」にあるようには、人類が木星に有人機で到達ということは現実では起こりませんでした。

SFは、スタートレックのように400年くらい先なら、なんでもありで許されるかもしれませんが、30年くらいでは読者は生きているので、失望がやがてやってきてしまいました。

20世紀前半に書かれたSFでは、21世紀は100年後でなんでも可能になっていると思われた時代だったことがわかります。

ただ、1960年代に日本のロボット工学を立ち上げた第1世代のロボティクス研究者の大先輩たちは、「I, Robot」を読みふけり、どうやったら実現できるかと夢想したと聞いています。そして、日本ロボット学会員は、日本SF協会の皆様と何故か共通言語が多いようです。「われはロボット」の巻末には、日本ロボット学会にもよく出て頂いている作家の瀬名英明氏の解説が寄稿されており、ロボットSFの歴史がよくわかります。

「ロボット」「われはロボット」どちらも気楽に読める小説です。なんでこんなものから工学ができてしまったのか不思議ではありますが、それは「人工知能 A.I.」も一緒ですので、まあ気にせずに楽しむのが一番だと思います。